

## 「エクスプリマチュア・チャイルドの長期養護」 に関する研究

分担研究者	日本大学小児科	馬	場	一	雄
研究協力者	東邦大学周産期センター	藤	井	と	し
	名古屋市立大学小児科	小	川	雄	之亮
	国立武蔵神経センター	有	馬	正	高
	愛知県心身障害者コロニー	高	橋	彰	彦
	国立精神衛生研究所	池	田	由	子
	伊豆通信病院	森	永	良	子
	国立長崎中央病院小児科	増	本		義

この研究班では、未熟児として生れた子どもの成長・発達の評価基準、罹患しやすい疾患の予防や早期治療の方法、親子関係や精神衛生的事項などの検討を行って来たが、それらの成果をふまえ、合せて各研究協力者の意見を参酌して未熟出身児の長期養護のための指針を提案したので報告する。

今年度は、各研究協力者により、ハイリスク新生児の outcome score, 脳障害の発生にかかわる低体重出生と双胎の役割に関する研究、多胎児とくに双生児への養育態度をめぐって、被虐待多胎児の事例研究、expremature child の身体発育について、エクスプリマチュア・チャイルドの精神発達、未熟出生児をもつ母親の調査、乳児期の言語発達尺度化の試み等について研究が行われたのでその概要を報告する。

馬場は脳性麻痺を後障害としてのこした児について、その危険因子を検討し、ハイリスク新生児の後障害発生予測のための定量的評価法を作成したが、本年度は1980年1月から、1981年12月までの2年間に日大板橋病院 ICN に入院したハイリスク新生児のうち、生後1週間以内に入院し、かつ1年以上経過観察した 293 例について、outcome score をあてはめその有用性を検討した。

有馬は脳性麻痺（CP と略）における低出生体重児の占める意義の年度別変化、および双胎による脳障害の特徴を明らかにすることを目的とした。CP において低出生体重児の占める比率は減少せず、特に高度の低出生体重児の比率が漸増している。一般人口中の CP の減少の一因として 2,001~2,500 g の軽度低体重群の減少が役割りを果たしていると考えられる。双生児は脳障害の原因として無視できないが、その重篤さを CT でみた場合、他方が死亡した場合がもっとも障害の範囲が大で軟化病巣と萎縮が著明であった。しかし、軟化病巣は他方が正常の場合にも存在した。同胞ともに罹患した生存例の場合は脳病変はむしろ軽く、遺伝的なものも可能性があろう。以上、双胎にともなう CP の機序は異種性があろうと考えられた。

池田はその1で多胎児とくに双生児への養育態度をめぐって報告した。多胎児をもつ母親への指導について12項目を挙げて強調している。その2で、被虐待多胎児の事例研究を行なった。

藤井はエクスプリマチュア・チャイルドの身体発育について検討した。

小川はエクスプリマチュア・チャイルドの4才6カ月に至る精神発達、知的発達について検討した。在胎28週以下の超未熟児群は、DQ はなお有意に低値を示したが、corrected DQ では有意差は認められない。18±1 カ月時の成績に比べて運動、理解・言語の領域での著しい発達を認めるが、探索・操作、社会、食事・生活習慣の領域ではなお低値を示した。1才半時のDQ と3才半時のIQ の比較成績から、1才半検診時における精神発達の所見から後のIQ もしくは知的発達を予測することには慎重であるべきことが示された。エクスプリマチュア・チャイルドの精神発達や知的発達の判定には長期且つ定期的なfollow up が必要であることを強調している。

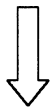
高橋は未熟出身児をもつ母親の調査を行った。退院後の母親の悩みや苦労は大きく、子供の発育や健康に係わる問題とそこから生ずる人間関係や生活環境に係わる問題の2つに分けられることを指摘している。本調査では前者の訴え率が高いという。後者の訴え率は少ない。前者の多くは子供の順調な成長をみることによって、あるいは、合併症や発達障害が残らない限り解決していく。未熟出身児をもつ母親に対しては、特に0～1才までは特別の育児に対する指導、援助の体制が必要であることを強調している。

森永は乳児期の言語発達尺度化を試みた。未熟出身児では、知能の発達が正常といわれても、学童期になると認知能力のアンバランスから生ずる言語機能の問題をもつ場合がある。森永は理解言語の発達を観察するために、Caplan, F. の乳児期の発達尺度の言語発達を参考に日本語の乳児期の理解言語の尺度化を試みた。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



この研究班では、未熟児として生まれた子どもの成長・発達の評価基準、罹患しやすい疾患の予防や早期治療の方法、親子関係や精神衛生的事項などの検討を行って来たが、それらの成果をふまえ、合せて各研究協力者の意見を参酌して未熟出身児の長期養護のための指針を提案したので報告する。

今年度は、各研究協力者により、ハイリスク新生児の outcome score、脳障害の発生にかかわる低体重出生と双胎の役割に関する研究、多胎児とくに双生児への養育態度をめぐって、被虐待多胎児の事例研究、expremature child の身体発育について、エクスプリマチュア・チャイルドの精神発達、未熟出生児をもつ母親の調査、乳児期の言語発達尺度化の試み等について研究が行われたのでその概要を報告する。